

「火葬待ちで 10 日間」もザラ… “火葬場不足”問題の切り札「2 か月長期保存」も可能な「遺体安置冷蔵庫」大人気の裏側



「火葬待ちで 10 日間」もザラ... “火葬場不足”問題の 切り札「2 か月長期保存」も可能な「遺体安置冷蔵庫」 大人気の裏側

2023 年 08 月 20 日



「火葬待ち」家族が続出(※写真はイメージ)(他の写真を見る)

昨年、国内で死亡した日本人は 156 万 8961 人と「過去最多」を記録。2040 年に年間死亡者は 167 万人に達し、ピークを迎えると予想されている。本格化する「多死社会」を前に、すでに首都圏を中心とした都市部では火葬場不足が深刻化。いまや 1 週間程度の「火葬待ち」は珍しくないとされる。そんななか“受注急増”で注目を集めるのが、遺体を腐敗させることなく長期安置するための「冷蔵庫」という。

都内の葬儀会社関係者がこう話す。

「最近では 10 日間程度の“火葬待ち”はザラ。なかには亡くなってから 2 週間、火葬できなかったケースもある。亡くなる人の数は年々増えているのに火葬場の数は変わらないという不均衡が、とくに人口の集中する都市部で顕著になっている。火葬を待つ間、通常はドライアイスを用いて遺体の腐敗や劣化の進行を抑えるが、それも 4～5 日程度が限界です」

そのため“火葬待ち”に直面した家族から「より長期での遺体保存」を求める声が高まり、業界としても対応に急ピッチで追われているという。

「葬儀会社のなかには自前で遺体の保管設備を持っていないところもあり、また持っても 1～2 体程度しか対応できない業者も少なくない。需要の高まりを受けて、いまでは遺体を預かるだけの専門業者も登場するなど、“火葬場不足”への対処は業界内で喫緊の課題に浮上している」(同)

現在、そんな悩める家族や業界関係者の“駆け込み寺”となっているのが、遺体安置用の「冷蔵庫」を開発するメーカーだという。

ドライアイス不要で「長期保存」

都内・日野市に本社を置く「株式会社クーロン」代表の阪口茂氏が言う。

「近年、“なかなか火葬できない”という事態に困惑した家族が葬儀会社を通じて弊社に注文してくるケースが増えています。ドライアイスを用いた保存法では、どうしても日数が経つとご遺体が酸化などのためにドス黒く変色してしまう。コロナ禍で家族葬が増えたこともあり、ご家族の間で“できるだけ綺麗な顔で最期のお別れをしたい”という想いが強まっていることも受注増の背景にあると考えています」

同社が開発した遺体保存装置「PERSONA:ペルソナ」はドライアイスが不要で、1か月以上の長期保存も可能という。その理由について、阪口氏がこう話す。

「遺体専用トレイ(棺桶)内の温度をマイナス4~0度に保ち、トレイ内に電場を発生させ、ご遺体をパーシャル状態にして保存するためです。電場を発生させることでご遺体に振動を与え、体内の水分子を共振。そうすることで水分子の集まりであるクラスターを細かくし、細胞を壊さずに沸点を下げるができる。これにより遺体を凍結させることなく、劣化や腐敗を防ぐことが可能になります」

取得済み特許証

特許第6603275号

特許第6603434号

特許第6924092号

特許第6954961号

特許第7023639号

特許第7242365号

「これまで最大で45日間程度、ご遺体を綺麗な状態のまま保存できたケースがあります。トレイに付いている蓋を開け閉めしなければ、2か月程度の保存も可能です。最近では葬儀会社以外にも病院や火葬施設を持たない地方の村役場などからの問い合わせも増えています」(阪口氏)